

視点

「町の品格」

毛呂山町長
埼玉県町村会会長

小沢 信義



国家の品格という本がベストセラーになった。町の品格は…と考えてみた。

出雲伊波比神社のやぶさめ（流鏑馬）がある。毛呂山町のやぶさめは、県内唯一の馬三頭によるもので、940年も続く伝統行事であり、毎年11月3日、やぶさめが奉納される。馬の乗り子は小学高学年から中学生の子供である。神社の専用馬場を三頭が駆け抜ける。その勇壮で迫力ある姿に観客は魅了される。

祭礼の事前の数多くの行事を守り続けていること。祭り当日も若武者姿で馬に乗り、弓を射る武士的なことが、旧数ヶ村もの農家によって続けられてきたことは大きな特徴である。これも神社、氏子の神事だからこそと思う。

このような自慢のやぶさめ祭りがある近隣の町同士が来年の10月31日～11月3日までの間に、やぶさめサミットを開催する準備を進めている。毛呂山町にとって、郷土を支えるやぶさめ祭りを続けること、伝統行事を守り続けることも町の大切な品格だと自負している。

もう一つ、毛呂山町には“ゆず”がある。ゆずは文献によると江戸時代中期、土産物として重用されたとある。終戦後に東京神田市場では「桂木のゆず」として名声を高めたものだ。11月中旬になると、里山の滝ノ入、阿諏訪、鎌北地区にゆずが黄金色に実る。ゆずは何と言っても香りを楽しむもの、この香りを贈答品にしている町の特産。“香りが特産”思えば何と品格のある特産だろうか。

先人たちの並々ならぬ弛まぬ努力と土地柄のお陰様である。山あいの村、のどかな里山に生り下がる黄金のゆず。大らかで美しい光景と香りが人々の心まで癒すことができる

● “ゆず”は、正に町の自慢の品格だ。その他にも、里山の美しさ、源流からのせせらぎ、町の鳥めじろなど自然の美しさを実感できる町だ。

● ここで更に特筆しておくべきことは、毛呂山町には埼玉医大があり、私は、「福祉と保健と医療の町」と申し上げている。埼玉医大の前進は毛呂病院である。毛呂病院には、精神病棟と重度心身障害者のための施設“光の家”がある。毛呂病院の精神科に入院されていて社会復帰を目前にしている患者さんは、地元の企業、あるいは農家等に作業治療というかたちで昼間は病棟から街に出て働いたものだ。住民と共有共通の生活、文化が日常的に行われていることこそ社会福祉を住民と共に支える品格ではないか。

● 更に、毛呂山町には児童養護施設の社会福祉法人「神愛ホーム」がある。終戦後、戦争孤児を預かる施設として町の篤志家が建てた。今は様々な事情により親と一緒に生活できない3歳～18歳までの子供50人程が生活している。子供達は地元の幼稚園に通い、小学校から中学校へと進んで、働けるようになるまで住民として生活している。これらの子供たちを地域で支えようと、町の人達が後援会を組織してバザーを開催したり、もちつきやクリスマス会を開催したりして物心共の支援をしている。県内18施設しかない児童養護施設が町にあることこそ、品格といえるのではないのでしょうか。

● このような自然、歴史に育まれ、恵まれた町。住民が改めて意識しなくても福祉の町が住民自らの心によって、時を刻んでいる町が毛呂山町だ。